

寂聴記念会だより

皆様、お変わりございませんか。寂聴さんの好きな風薫る五月になりました。今年は生誕百三年を迎えます。著書を読み進め、語り合い、たくさんの方の発見をしていきたいものです。

『寂聴と戦争』展 開催中

徳島県立文学書道館では、現在「寂聴と戦争」展が開催されています。

北京で敗戦を迎え、それまでの軍国



1991年 イラクの病院を見舞う (有)寂 提供

主義教育の中で、何の疑問も持たず、国家のいいなりに行動してきた寂聴さんは、自らの反省に立ち、今後は自分の頭で考え、行動していこうと決意します。

文章で戦争反対を訴えるだけでなく、湾岸戦争の際は即時停戦を願って断食をし、停戦後はイラクに渡り、戦争で傷ついた子どもたちを見舞い、病院に薬を届けました。2015年には安全保障関連法案に反対して、国会前でスピーチを行いました。病み上がりにもかかわらず、京都から車椅子でかけつけたのです。

寂聴さんの反戦への思いがこめられた著書や原稿、写真の数々が紹介されています。(5月25日まで開催)

総会のお知らせ

6月22日(日) 午後2時～3時
文学書道館にて

出欠予定を5月30日までにお知らせください(メール・ファクス・葉書のいずれかで)。

総会後、本田耕一さんによる学習会「パレスチナの現状から」を開催します。

第6号
2025年
5月15日発行
瀬戸内寂聴
記念会

題字
島田聖翠

『寂聴先生が残してくれたもの』 元秘書瀬尾まなほさん出版

寂聴さん晩年の十年をともにした秘書の瀬尾まなほさんが、その日々を回想しつつ、二人の男の子の母となつて奮闘する毎日の中で考えたことを綴っている。

現在、瀬尾さんは寂聴さんの著作権管理の仕事をつとめる一方、寂聴さんにすすめられた書く仕事や講演活動も続けています。寂聴さんが代表呼びかけ人を務めていた「若草プロジェクト」の理事としても活動している。このプロジェクトに参加するとき、寂聴さんは

「まなほ、宇宙と自分、世界と自分、日本と自分をいつも意識しなさい。もう自分のことばかり考えていてはいけませんよ」と声をかけたそう。

DVや性暴力、虐待、貧困などに苦しむ若い女性や少女たちに寄り添うためのこの活動は、元厚生労働省の村木厚子さんや弁護士の高・大谷恭子さんが寂聴さんに相談に来て始まった。瀬尾さんはこの活動に参加して、親や周囲が原因で、安心して生活できない少女たちがたくさんいることを初めて

知り、社会の仕組みや支援の仕方を変えるようになる。

また「宝物」である、三歳と五歳の子どもに挟まれて眠る幸せも綴る。自分が育った祖父母の住む田舎で、子どもたちをのびのびと遊ばせて、幼少期を思い出し、自然の中で愛情を受けて育つことに感謝する。

「私が死んだらチビのこと守ってあげる」と言い残した寂聴さんは、長男を「最後の恋人」と呼んでかわいがった。一緒に寝て子守唄を歌い、絵を描き、遊んだ。

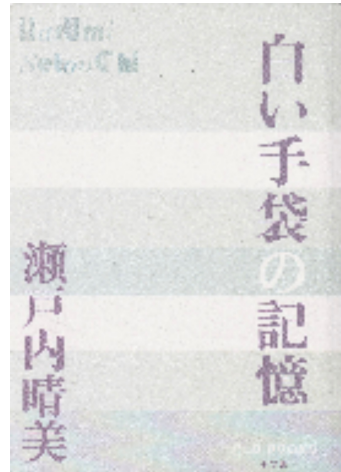
「美は乱調にあり」の章では、寂聴さんの「おかしいと思うことは主張するべきなの。それが人間の権利だから」と語った言葉を瀬尾さんは思い出す。

夫婦別姓の議論が続く現在に、「まだそんなこと言ってるの? 100年前にそれおかしいって私言いましたよね?」と平塚らいてうなら怒りそうだと思う、「烈しく美しく生き、死んでいった寂聴先生や野枝たちに、私はこれからも問われつづけるのだろう」と書いている。



行事報告

「寂聴文学を愉しむ会」12月19日



作品「痛い靴」

（同人誌「文学者」1955年5月号に掲載。寂聴の純文学処女作といわれ、『白い手袋の記憶』に収録されている。）

参加者の感想

主人公の頼子の嫉妬心が強烈に表現されている。思い詰めた女の凶暴さ、惨めさが印象的。でもその憑りつかれた状態から、最後明るい未来が見えてホッとした。

寂聴さんはこの頃から、愛とか性とか、三角関係などのテーマではつきりと描いているんですね。あと、題名が「痛い靴」、いいタイトルですよ。

主人公の夫が若い愛人との関係をプラトニックだと告白したとき、プラトニックはよけい救われなと言いつつ放った。ずいぶん前に『恋におちて』とい

う映画があった。デニール扮する夫が、プラトニックなんだ、と告白するシーンがある。妻はそれでよけいに怒るんです。プラトニックよりまだ体の関係があったほうがマシ、より本気度を感じるからと。

痛さのなかで、前向きに自分の足で歩いていく。つまり痛みを自分のなかで引き受けて、自分の物にして一歩踏み出している。女性の自立という未来が見える短編。

ラストで主人公の頼子が考えを変えて再出発するのに対し、夫はその変化についていけない。女は傷ついても、糧にして開き直って前に進む。

この小説に出てくる靴って頑張って買った高級な靴なのかな。なんで女性には、わざわざ足に合わない痛い靴を買うの？でも新しい靴を穿いて、夫へ向けて蹴上げるしぐさは可愛い。なるほど、靴は生き方か：なかなか男には分からないよ。

確かに男はこの人を大事にしたいと思うと、将来を考えるから慎重になるかも。嫌われたくないし、すごく誠実に接します。そう思うと、主人公頼子は夫の愛人へのプラトニックの下心を当てた、すごい。

皆の意見でこの短編は時制の流れが不規則で、話が掴みにくいとあった。

純文学の作家は短編という限られた枠のなかで、いかに冒険するかを考える。この短編に関しては、時制の流し方において冒険している。

作品「白い手袋の記憶」

（1957年「Z」3月号に掲載。小学校時代の儀式のときの校長の白い手袋に始まる軍国主義時代の記憶と戦後の新しい生き方への出発を綴る。）

参加者の感想

この作品の最後、「白い手袋の幻影をなげうち、じぶんの靴でふみにじったその土のうえに、じぶんの文学をうちたてたい」、と寂聴さんの宣言がある。その熱の熱さ！映画「風と共に去りぬ」でスカーレットが、死に物狂いで畑の人参を齧りながら「わたしはもう二度と飢えたりはしない！」と叫びながら誓うシーンを思わず思い出した。

戦争に正義も正解もないですよ。間違ったことでも正解になる怖さ。むごい時代。現代に生まれたことの幸せを思います。

生涯、作家として反戦、反権力の立場で物を書くという原点がこの作品にあることがよくわかります。「一たび、目のうろこをはがされたわたしは、もう決して、じぶんの目でみつめ、じぶんの手でふれ、じぶんの魂が感得したものでないかぎり、何物をも信じまいと決心した」。私にとって寂聴作品を

好きになつたきつかけの文章。

私の両親も大正生まれ。戦争の経験を乗り越えて平凡な家庭を作った。母はいかにも「日本の母」のモデルみたいな人だったけれど、私が結婚するとき「結婚しても好きなことをしてもいいよ」と言ってくれた。母のこの一言が意外で驚いた。考えると、死ぬか生きるかを生き延びてきた両親だった。心のなかでは、もしかしたら寂聴さんと同じような想いがあったのかも。

戦争の画一的な教育の怖さと思う。自分の愚かさを白状しない限り前へは進めない、という寂聴さんの決意を感じる。

この作品を読んで思い出したのは、同時代の作家、三島由紀夫の「金閣寺」。戦後社会とどう折り合いをつけて生き、小説家として立つのか、三島は苦悩し「金閣寺」を書いた。寂聴さんのヴァージニア・ウルフの引用が印象的だった。ウルフの言動を小説家としての指針にしたのでは。

私の父は昭和2年生まれ。兵隊になるための健康診断に高松へ行つたけれど、結核がわかり返されてしまった。本人はものすごく戦争に行くつもりだったのに、あなたは体が駄目だ、と言われた。二十代の青春を療養して過ごした。でも戦争に行かなかつたから、いま私はここに居るんだと実感。

◇ 作品集の最後にこの「白い手袋の記憶」が配置されている。その配置、順序の意味、そして重石のような最後の作品。その意味をもう一度考えたい。

『余白の春』を読む 4月18日



この作品は「婦人公論」1971年1月号〜72年3月号に連載された。大逆事件の首謀者として捕えられ、獄中で23歳で自死した金子文子の生涯を描いている。

参加者の感想

文子は幼少の頃から過酷な境遇で育ち、だからこそ虚無主義に傾倒していくのは納得。でも同じ思想を持つ朴と出会うと、希望が見えたのでは。大変な人生だったが、精神的には幸福だったと思う。驚きは、その才能。彼女は予審廷で答弁を、原稿なしでまくり立てたり、獄中で七百枚の自伝を書いたり。その自伝がなければ寂聴さんもこの本を書けなかった。そう思うとペンの力はすごい！

朝鮮半島への日本の侵略など、改めて日本の歴史を思い出し、知りました。でも金子文子は美人と言う人もいたし、そうでもないという人もいるし…。なかなか人物像が掴みづらい。結局は、愛と自由を求めて闘ってきたのかな、と思いましたね。

◇ 金子文子はマグマのような人ですね。生まれた時からの逆境も物ともせず、自分の人生は自分で切り開くその熱量に圧倒。文子の手紙の文面は男臭い文章、でも短歌は素直でいじらしい。過酷な環境に生まれてなければ、頭の良い優しい女性でいられたのかも。

◇ 作品タイトルが『余白の春』となつていいるが、その題の意味って何？そういえば、作中には、余白の春という言葉は出てこない。単純に考えると、「春」が来なかった、「余白」にしか春がない、という感じが。彼女が理想とする社会がまだ到来していない、という想いとか。ただ、この作中にはあまり春のイメージはない。とすれば、なぜ寂聴がこのタイトルにしたのか、本人もなにも語っていない。今となつては永遠の謎。

◇ 人生はほんとうに理不尽。父親は自分の都合で文子の戸籍を作らなかった。加えて、朝鮮での祖母と叔母のいやらしさと言ったら。日本は朝鮮を侵略して悪いことをしたけれど、当の日本人はそれが正しいと思つてやっている。いま朝ドラで「あんぱん」をやっているが、裏切らない

正義、というセリフが。いったい正義とはなんなのか？

◇ 今回、50年ぶりに読み返した。はじめて読んだのは22〜23歳の頃。若い頃は燃え立つ若い気持ちで読んだ。今現在は、それこそ「何が私をこうさせたか」と客観的に読んだけど、この賢さがもつたいない！享年23歳、若すぎる。でも相手の朴は長生きしたんですね。しかもものに結婚して、子供までいるし。50年を経ての再読、いろんなこと思い出した。

◇ 文子は早熟で頭の良い女の子だったんでしょ。環境が彼女をそうさせた。：もう衝撃で。ストーリーを追うだけじゃ一杯。この関東大震災の朝鮮人へのあんな噂が飛び交い、虐殺に繋がったという事実は社会科で習った。群集心理は恐ろしい。

◇ 文子は誰にも愛されず、一生を終えた気がする。彼女に愛を注いだ人は出てこない。朴にしても。彼女は愛を求めていたのに…。母親からも愛情を注がれなかった。自分からは恋をするけれど、温度差があった。ほんとうの愛とか恋とかを求めながら生きていたのでは。例えば母のことを短歌に書いているが、母への報われない思いとか、愛とかを抱いていたのが分かる。可哀そうな印象をどちらかと言うと彼女には感じる。

◇ すごく悲惨な子供時代を送っている。けれど、ある程度大きくなって裁縫学校

へ行くと、父親に言われても、嫌だと言つて行かなかった。自分の好きな世界に突入していくところは、すごく憧れるし、羨ましく感じる。ただ恋愛にしてもこれから愛される経験を積んでいく時期なのに、この若さで亡くなるのは可哀そう。これからのいろんなことが出来たのに。親ガチャではないが、環境が違えばどんな人になったのだろう。

◇ 去年の新聞やニュースでも話題になったが、小池都知事は、関東大震災時に虐殺された朝鮮人犠牲者の追悼式典に、8年連続追悼文を送らなかった。加えて当時の官房長官も「政府として調査した限り、政府内に事実関係を把握できる記録が見当たらない」と発言して問題にもなった。史実を認めない虐殺否定論は、為政者にとつて都合の良い歴史修正主義では。あつた事実を記録として残していくのも文学者の使命。記録することの重要性を思った。

◇ この読み物を朝鮮半島の人々が仮に読んだなら、どう思うだろうか、という視点で読む。この本をハングル語に翻訳して出版したとしたら、韓国社会で受け入れられるだろうか？私は受け入れられると思う。なぜなら韓国人が読んでも共感できるから。この本には日韓の歴史的背景や戦時中の日本に侵略された朝鮮人たちの想いが出てくる。そういう意味でも、この本が日韓を繋ぐ架け橋のような存在になるのでは、と考える。

ひろば 会員のたより

文学と朗読「夢はかり」

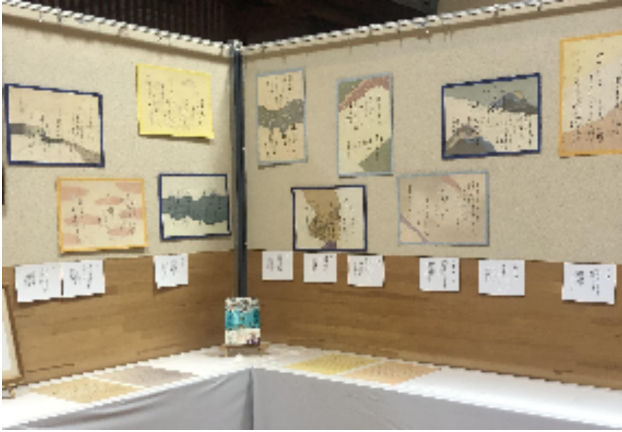
事務局 藤村純子

また若葉萌ゆる季節が巡ってきた。
朗読を活かせる場を作ろうと2017年6月に仲間と立ち上げた、文学と朗読「夢はかり」の活動は、今年丸八年を迎える。

その間、手探りながらも、金子みすゞ展、柏木康浩著「瀬戸内寂聴物語」朗読会、羽尻利門展、太田治子著「幻想美術館」朗読会など、徳島にゆかりのある作家や作品を取りあげ、著者をお迎えして朗読とトークで紹介してきた。

どのイベントも、予想以上の来場者も多くの方々の力をお借りしての開催であつた。その都度、ゲストのトークからは興味深い未知の世界が窺え、作品に込められたメッセーじや歴史的背景を知ること、より作品の深さに気づかされる。お客様と同じ場所、同じ時間を共有する一体感、仲間とともに温めてきた想いを形にする面白さや達成感、何ものにも代え難い経験となつた。

20年前、なんとなく始めた朗読だったが、



2009年の文学書道館「寂聴展」で「場所」を、その後「比叡」を、ナルト・サンガでは「夏の終り」を輪読する機会を得、だんだんと朗読の魅力に引き込まれていった。寂聴作品は女性の生き方や心の機微が独特な文体でいきいきと描かれ、読むほどに心惹かれていく。今でも練習でボロボロになった台本を開くと、忽ち仲間に助けられながら読んだ「場所」が蘇る。「場所」が私の朗読の原点だと改めて感じている。

朗読から出発した「夢はかり」は、今では読書会（大石征也代表）、句会（佐滝幻太代表）、書道教室（島田聖翠代表）が加わり、文学を愛するメンバーが増えた。

「瀬戸内寂聴記念会」発足後は、俳句「寂聴を詠む」全国募集や「寂聴忌句会」に関わらせていただき、昨年の書道展（聖翠展）では、「寂聴源氏物語」をテーマに、各々が和歌を選び仮名で表現した。並べて展示した美しい装丁の本「寂聴源氏物語」は多くのお客様の目に留まつたようだ。

微力ながらも「寂聴さんを後世に残す」お手伝いができればと思っている。なお「夢はかり」は、ほぼ全員「瀬戸内寂聴記念会」の会員である。

第15回 地域再生大賞

優秀賞受賞

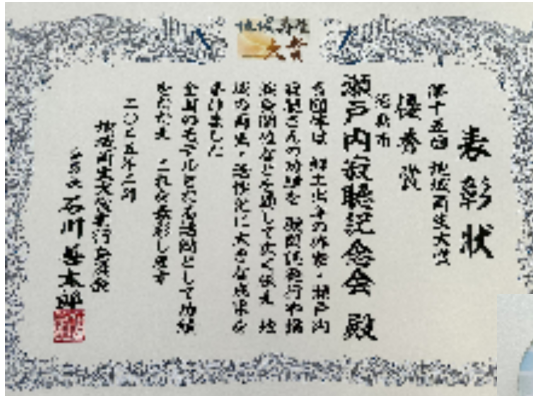
2025年2月27日

地域再生大賞は、人口減少や高齢化に悩む地方で、まちおこしや地域課題の解決に取り組む団体を応援しようと、地方新聞47紙と日本放送協会、共同通信社が創設したものです。

今回は「今、ここで暮らしたい 切り拓くエネルギー」がサブテーマで、優秀賞を受賞しました。

「機関誌や講演会など多彩な活動で郷土の作家を顕彰する取り組みを選考委員が高く評価しました」と事務局よりメッセーじをいただきました。

この賞を励みに、今後とも互いに研鑽し、未永い活動を続けていこうと思います。



寂聴のことば

伝記はすべて、対象に著者の魂が投影されている。そこに読者にとっては二重の読む愉しさが加えられるのである。

寂聴の書評―島本久恵著『明治の女性たち』―より（1966年11月「週刊読書人」）

竹内紀子

お知らせ

新年度になりました
会費3000円の振込をお願いします。

阿波銀行 蔵本支店

普通 1229692

清重康代

徳島大正銀行加茂名支店

普通 8601495

瀬戸内寂聴記念会

会計 清重康代

機関誌「寂聴」4号

原稿締切は9月15日
です。

瀬戸内寂聴記念会 事務局

〒770-0856 徳島市中洲町3-40-802

Fax 088-661-3292

email kikanshi@setouchijakuchu.com